

盆器を考える

田中本家博物館の盆器コレクション

①万年青鉢

Bonki : Based on the research about Tanakahonke' s flowerpot collection

1. Omoto

堀 真子
Masako Hor i

概要

この「盆器を考える」と題したシリーズは、信州須坂藩の御用商人をつとめた田中本家の生活の品を保存公開する「豪商の館 田中本家博物館」所蔵の盆器コレクションの調査をきっかけとし、江戸時代後期からの園芸文化とともにあった、様々なやきものの盆器について資料紹介と考察を行ってゆくものである。今回は、そのなかでも黒楽焼の万年青鉢を取り上げる。

黒楽焼の万年青鉢は、これまで陶磁史上で注目されることがなかったものだが、江戸から現代にかけての豊かで深い園芸文化の発展を象徴するひとつである。謎の多いこの種の鉢の情報整理を行うとともに、田中本家での使用状況から同家のコレクションの性格までを探る。

1. はじめに

古代から四季の移ろいを愛し、多くの樹木や花とともに暮らしてきた日本の人々。戦国時代も遠ざかった江戸後期に、公家や将軍家をはじめ多くの武家から一般庶民にまで老若男女問わず一大ブームとなったのが園芸である。庭木から鉢植えまで多種多様な植物を栽培し鑑賞する文化が生まれ、それとともに盆器の素材・種類・意匠も一挙に増加し、よりいっそうの園芸ブームの隆盛の一端を担っていた。その後も園芸の流行は明治～昭和を通じて現代まで繰り返されている。

この「盆器を考える」と題したシリーズは、信州須坂藩の御用商人をつとめた田中本家の生活の品を保存公開する「豪商の館 田中本家博物館（以下、田中本家博物館）」^(註1) (図1) 所蔵の盆器コレクションの調査をきっかけとし、江戸時代後期からの園芸文化とともにあった、様々なやきものの盆器について資料紹介と考察を行ってゆくものである。盆器の主要な素材であるやきものは、種類としても陶器、磁器、焼き締めにまで及び、その形状や用途も多岐にわたる。田中本家博物館所蔵盆器も、使用された当時の流行や主人の好み等の

要素が入り交り独自のコレクションが形成されている。このコレクションの中で、今回は黒楽焼の万年青鉢を取り上げる。おそらくこの種の鉢については、これまでに陶磁史上で取り上げられることはなかった。

そのため、陶磁史におけるの先行研究はほぼ皆無である。しかし、万年青という、豊かかつある種コアな江戸の園芸文化を今に引き継ぐ園芸界の中では、常識的な存在である。本論では、この黒楽焼の万年青鉢についてその出現と生産者を探り、そして田中本家で蒐集された万年青鉢がどのような性格をもつものかを考察してゆく。

2. 盆器の定義

まずは「盆器を考える」の初回ということで本論における盆器の定義を提示しておきたい。盆器は広く“盆栽の器”の意で用いられる言葉である。盆栽鉢、水盤（水石盤としても使われる）が含まれる。用途としては、樹木・草花を植えたり、水石を觀賞したりと、園芸にかかわる栽培、觀賞の対象を植えるための器である。盆器として生産されたもの以外に、食器や花器などを（必要であれば後穴を空けて）、「見立て」で使用することもあったようだ。まずその素材だが、木製、石製、陶磁製が主となる。現代においては、プラスチックも広く用いられる。陶磁製については、今回は江戸期以前の状況にさかのぼって調査することができなかったが、大橋康二氏によれば、日本で盆器の素材として広く用いられるようになったのは17世紀以降^(註2)とされる。大きく分けて中国より渡来した鉢と国産の鉢があり、古代から近世の日本のやきものの普遍的な価値観と同様に中国渡来の鉢は重宝され高値であった。先述の通り、陶器、磁器、高火度焼成の焼締（炆器）がある。

では特に、本論で扱う陶磁製の盆器についてみていく。陶磁製であることは、丈夫で多様な形状、装飾法が用いられることなどのメリットが考えられる。産地としては、高火度焼成の焼締では中国の宜興窯の朱泥・紫泥のものが最高級とされ、国内では常滑や備前が一大産地である。磁器製、陶器製のものとなると、一部産地のみはブランド化しているものの、窯業地であればそのほとんどにおいて生産されていると思われる。磁器の盆器は、有田と瀬戸・美濃が主要産地だが、関西や九谷でも生産されているようだ。陶器の盆器も信楽や丹波、武雄などの大きな産地から、偕楽園焼などの御庭焼の性格に近いものまで存在する。京都では、幅広い技術によって磁器鉢から鮮やかな色使いの楽焼や、今回注目する黒楽の鉢もある。

生産時期としては、全国で盆器生産が増加したのは、やはり江戸後期の園芸ブームに合わせてのことだろう。大橋氏によれば17世紀には徳川将軍家を迎える「御成」と、オランダ東インド会社の注文によるヨーロッパ向け製品なども江戸初期からの盆器の需要の中にあっただが、「いよいよ植木鉢の需

要が高ま」ったのは「18 世紀後半に鉢植えが流行るの」^(註3)に合わせたことである。この時期は、有田から各地へ磁器製法も拡大し多くの庶民が磁器の器を日常に取り入れはじめた一種の「磁器ブーム」の頃でもあり、各地で多くの需要に応える体制が整ったものと考えられる。その後は、盆器は園芸の流行廃りと密接にかかわっていることから、明治～昭和を通じて第1 次世界大戦前までが生産のピークとされる。

盆器の形状は、栽培用と観賞用などで多岐に渡るものの、植えられる樹木や草花によって用いられる大きさや形状がおよそ決まってくる。盆栽鉢は浅型・深型ともに角・丸・楕円が多く、水盤は浅型。脚は、丸は三脚が多く、楕円と角型の場合はほぼ四脚である。脚は別に成形され接着されるものから、切込みでごく浅く付けられるもの(碁笥底)、足の無いもの(ベタ底)もある。盆栽鉢には、底に水はけのための穴が開けられるが、まれに後穴も見られる。

装飾法としては、盆器に限って存在する装飾法や、逆に盆器において避けられる装飾法は今のところ見受けられない。特に観賞用の盆器については、食器、酒器などと同様に、やきものにおけるあらゆる装飾が取り入れられてきた。江戸から現代を通じて比較的共通する装飾法を書きとめておくと、まず陶器、磁器共に様々な色の釉薬が用いられる。陶器では黒、白などの単色を施したもの(図2)から、大胆な釉流しを用いたもの(図3)や、窯変で表情に変化をつけたものなどもある。磁器では、瑠璃釉や青磁釉の全面施釉も多い(図4)。文様は、染付(図5)、上絵金彩やレリーフの貼り付け(図6)、七宝(図7)など様々な装飾法が用いられる。

いずれにしても素材、形状や装飾法共に時代の流行や、植えられる樹木の流行に呼応し、その種類を拡大し続けている。

3. 江戸後期から昭和戦前にかけての園芸について

さて、ここで盆器制作の背景にある園芸の状況について簡単にまとめておく。特に本論は田中本家博物館の盆器コレクション調査に基づくことから、同コレクションの中心となっている江戸後期から昭和期戦前にかけての状況をみることにする。

多数の園芸に関する文献資料を基に江戸園芸の状況を考察する小笠原左衛門尉亮軒氏によれば「(園芸)は、(農業)(本草学)を親として生まれ、(生け花)と(造園)の、双方を合わせて三位一体となって、つまりきょうだいのような関係を保ちながら発達し、生まれてきた文化」^(註4)である。同氏の論を要約させていただくと、仏前の供花からしだいに発達した生け花は、書院造り建築の中でインテリアの役割を持ち始め、やがて庶民が家の中に床の間を持つようになると栽培や品種改良が盛んになり園芸を大きく発展させたとされる。造園については、江戸の中で広大な土地を占める将軍家や大名の城と庭園の存在が、造園業と趣味人を生み、生け花同様に樹木の多様化を促進させた。

園芸を趣味とする人々の階層は、元禄の頃には広く一般庶民にまで広がっていたことが多数の浮世絵によってわかる。太田記念美術館による『江戸園芸花尽し』^(註5)を参照すると、縁日では金魚や食べ物の屋台と並んで多種の盆栽や朝顔、菊等が売られ、老若男女がみな思い思いに手に取っている様子が多く描かれている。珍しい植物があれば街中の話題となって人だかりができ、また、身近に市中の植木売りは歌舞伎でもたびたび人気の役者が演じる人気キャラクターであった。美人画の背景等であっても、盆器に植えられた植物は色鮮やかで正確な描写がされている事も多く、植物に対する当時の人々のこだわりがあったことが感じられる。

こうした人々の園芸熱を伝える浮世絵には、盆器が細かく描写されていることも注目される。これにより、形状や文様とともに、植えられた植物によってどのような鉢が選択されていた等の情報を読み取っていく事が出来る。とくにわかりやすいのは盆器や園芸道具具くしの類であり、樹木・草花の種類や盆器の取り合わせが細かく描かれている。また、市中の植木市などを描いたものからは、粋な文様が施された染付や凝った装飾の鉢には、大振りで形の良い樹木が植えられ、いかにも目玉商品として棚の上段に置かれている様子がわかる(図8)。それと比較すると素焼や単色釉の鉢には、寄せ植え用なのか小降りの草花が植えられ、地面に直接並べられている。

こうした状況は、明治維新後の浮世絵にも引き続き見られる。男性の髪形も変わり、東京の名所には西欧風の建物が登場しているが、変わらず老若男女が思い思いに園芸を観賞し、縁日では盆栽を買い求める姿が多く描かれている。しかし昭和の大戦期に入る頃に、ブームはいったん終息する。^(註6)

4. 田中本家博物館の盆器コレクションの概要

田中本家博物館の盆器コレクション(図9)の全容については、現在調査を進めている途中段階であることから、ここに記述するのはその概略となる。

4-1 総数

同博物館の把握する件数は246件。1件のなかに大きさ違いで2～3点以上数えられるものも多数あるので、総点数としては少なくともこのおよそ3倍は所蔵されていると推測される。

4-2 種類・大きさ

盆栽用の深鉢、水盤をはじめ、蘭、万年青用の鉢まで園芸を楽しむための多くの種類がまんべんなく蒐集されている印象である。大きさとしては径60cmを越えるものから、径7cmほどの小さなものまで形状ともに様々だが、最も所蔵数の多いものは染付を施した磁器の鉢だろう。つづいて、常滑か中国製の無釉の焼締め、さらに産地不詳の陶器のものがみられ

る。そして本コレクションの中でも特徴的な黒楽焼の万年青鉢がある。

4-3 産地

無釉の盆器として中国、常滑。磁器は肥前・瀬戸・美濃が多くみられる。同家の地元である長野周辺の陶器も含まれるようだ。黒楽焼は京都、東京、三河が考えられる。

4-4 使用状況

現在、本コレクションの大部分は使用されておらず、同家に園芸を趣味とする人物もいない。

では、この充実した盆器コレクションは誰の手によって蒐集されたのだろうか。これも現在のところ同家では明らかにされていない。もちろん、園芸は長く様々なブームを重ねながら親しまれてきたものであるから、歴代当主が蒐集を重ねるうちに充実したと考えることもできる。しかし、後述するようにかなり趣味性の高い盆器が一定数含まれることから、やはり一時期、園芸に関心のあった主人がいたと考えたほうが良さそうだ。

同家に保管されている写真資料を参照すると、大正期に敷地内で撮影されたものに多くの盆器が写りこんでいる（図10）ほか、田中千よふ氏と十一代当主となる田中太郎氏、その父である新十郎三次氏が並ぶ写真の背景には盆器棚がみられる（図11）。特に、田中千よふ氏（大正5年生まれ）の幼少期（大正10～11年頃か）に撮影された2枚の写真（図12、図13）には、人物の両脇に立派な盆栽が置かれる。このうち、少なくとも図の盆器は現存する（図14）。同館の田中宏和氏のお話も合わせて推測すると、盆器とともに撮影するよう指示したのは八代当主の田中佐賀氏（明治元年生まれ）と考えられる。佐賀氏は、同家の歴代当主の中でも特に着物の趣味を良くし、多数の着物や帯を蒐集していた人物である。細かな手入れが必要な園芸にも長けていたと考えるのは不自然ではなく、孫である千よふ氏、太郎氏の写真撮影の際に、自身の自慢の盆栽と一緒に写させたのだろう。蒐集された本コレクションの盆器のおおよその制作年代と、佐賀氏の趣味が円熟をむかえる時期も一致する。

また、宏和氏によれば、昭和37～38年以降に同家に務めておられた庭師の方々の記憶では、大型の盆栽が中庭や裏庭にあったという。さらに宏和氏は、昭和49年の時点で中庭の地面に大きなムロが設けられていたと記憶しているが、どのような種類の盆器をどのように用いていたかは現時点では不明である。しかし同家には、蔵書も豊富に残されていることから、趣味性の高い植物栽培についての教則本なども見つかる可能性は高く、また園芸に関する道具なども残されているかもしれない。今後の盆器調査と合わせて、資料面からも同家の使用状況を明らかにしていきたい。

5. 田中本家博物館コレクションの黒楽焼の万年青鉢

さて、本コレクションを特徴づける一つに、黒楽焼の万年青鉢が大量に蒐集されていることがあげられる。その数は、43件155点にのぼる。これらは黒く艶のある楽焼のボディの黒無地の鉢と、そこに色絵金彩で様々なモチーフを綿密に描きこんだ大変豪華な鉢とがある。盆器蔵のなかでも特別にしつらえた黒塗りの棚に収められ、とくに絵付けを施した鉢は棚の上部に整然と並べられている（図15）。黒無地のものは入れ子状のものや大型のものほかはコンテナに収められ積み上げられている。

以下、この黒楽焼の特徴的な鉢について、その歴史と産地をたどり、同コレクションの鉢がいつどこで制作されたものであるかを考察していく。

5-1 万年青とは

万年青とは^(註7)、ユリ科オモト属の常緑性多年草で、日本（西日本山地の陰地を中心）・中国・朝鮮半島南部・台湾などに自生する。葉芸と呼ばれる葉の形状の変化や葉の柄（班）、赤色の実の美しさ等を楽しむ植物である。中国では古くから菓草・吉事に用いられており、日本では観賞の対象として500年ほどの歴史があるという。慶長11（1606）年に徳川家康が江戸城入城の際に万年青を床の間に飾ったことから、諸大名をはじめ広く財力のある商人たちにまで観賞熱が高まったらしく、高価で取引された万年青は、幕府が売買禁止令を出すほどであった。江戸期で最もブームを迎えるのは文政年間とされる。その後、明治～昭和前期にかけ、たびたびファンを増やしブームが起こっている。一般的にも、常緑であること、赤い大きな実をつけることなどから引っ越し祝いや正月に用いられることで知られる。

いずれにしても、美しい葉芸を保ちまた品種改良などの独自の楽しみを突き詰めるためには日常的に細かな手入れが必要であり、いわゆる趣味の域に達していないと手を出せない類のものである。田中本家では、やはり歴代の中で趣味を充実させていた佐賀氏がこの万年青鉢コレクションを用いて栽培と観賞を楽しんでいたのではないだろうか。

5-2 江戸期：黒楽焼の万年青鉢の登場

葉芸豊かな万年青に合わせて、その鉢にも財が付き込まれたことは想像にかたくない。しかし、豪華な絵付けを施した黒楽焼の鉢は、文政年間の流行の際にすぐに万年青鉢の主演を独占していたわけではないようだ。万年青の専門家でおられる水野淳蔵氏の『万年青の歴史』^(註8)にも詳しいが、実際に残る絵画資料を参照してみたい。

まず黒楽焼と記載のある鉢は、長生舎主人が文政13（1830）年に出版した『金生樹譜』シリーズのうち園芸の技術や道具などをまとめた『別録一卷』^(註9)に場する（図16）。「京くろつば」と「京くろらく」の三脚の鉢はほぼ現代のものと同変わらない形状をしており、“太鼓鉢”と通称される突起の飾りが

ついたものには大きな花が描かれているようだ。この隣には「京あからく」の鉢や、「五こぐみ」で入れ子状になった鉢も挙げられている。

また、同じく長生舎主人が『金生樹譜』シリーズとして天保4（1833）年に出版した『万年青譜』^{（註10）}には、多数の鉢植えの万年青が描かれているが、こちらは染付とみられる鉢のみで黒楽焼のようなものは見当たらない。

江戸後期に「園芸家の中で奇品蒐集家の筆頭」^{（註11）}とされる幕臣・水野忠敬がいるが、彼が天保3（1832）年頃に出版した『小おもと名寄』^{（註12）}には、カラフルな鉢に1株ずつ植えられた万年青の銘品が記録されている（図17）。この鉢は染付や、おそらく京焼の色彩豊かで細かな模様が描かれたものもある。しかし本論で話題としている黒楽焼の鉢とみられるものは数点であり、これについては雲龍などの絵付けがされているものの単色で、色絵金彩ではないようだ。また、黒楽焼の鉢は現代でも万年青に限って使用されるわけではない。江戸後期に万年青と同時期に流行した福寿草やランの類（いずれも趣味性の高い植物である）を紹介している資料^{（註13）}には、黒楽焼とみられる鉢が登場している（図18）。

しかしこれらも、一部に上絵らしきものは施されているものの、豪華な色絵金彩ではない。先掲の「物尽くし」の浮世絵の中でも江戸期の絵では万年青は染付の鉢に植えられているが、明治に入ると黒楽焼の鉢に納められているため、この時期には定番化していたと思われる。（図20、図21）。

技術的に多色の上絵を楽焼に施すことができなかったというよりも、染付や色絵の京焼などで十分に色彩豊かな鉢の需要がまかなえていたとも考えられる。しかし、黒楽焼は茶陶にメインで用いられるように、やきもののヒエラルキーとしては上位に位置するものであり、高価な万年青や蘭の類にかなう鉢として楽焼が求められたのだとすれば、そこに更なる付加価値を加えるためにしだいに色絵金彩を施し始めたと考えるのが自然だろう。そして、その高級感と実際の高価な値から、万年青鉢（その他の趣味性の高い品種も含めて）といえ、黒楽焼と定番化されていったのではないだろうか。また、小笠原氏によれば、栽培面からも黒楽焼の鉢は万年青に向いているという。根が熱をもつ万年青や東洋ラン系のものは、熱を逃がしにくい鉢のほうが良いとされる。

5-3 明治期：「錦鉢」の登場—新出資料を基に

では、豪華な色絵金彩を施した黒楽焼の万年青鉢（以下、便宜的に「錦鉢」と呼ぶ）は、いつごろから京焼において本格的に登場するかというと、明治に入ってからのものである。

これまでに知られてきた明治期の錦鉢の資料としては、『万年青盆図譜』^{（註14）}がある。これは明治45（1912）年の東京両国美術倶楽部の古書展覧会に出品されていた著者不明の図譜を、植物学者の伊藤篤太郎（1866—1941年、愛知生）が写し刊行したものである。ここに記載されているのは、20数点

の色絵金彩を用いた豪華な黒楽焼の鉢である（図19）。この中には田中本家博物館コレクションにも共通する雰囲気のものもみられる。ただし、この資料の中で伊藤は、原本の正確な刊行年代は不明であるとしている。

さて今回、万年青鉢の調査の一環として、現代でも制作を続ける窯元を訪ねた中で、錦鉢に関する新たな資料の存在が明らかとなった。京都で楽焼の窯元として文政年間から七代を数える短冊家 和楽^{（註15）}に残る『錦画鉢模様控』^{（註16）}（図22）である。

本資料表紙には「明治二五年五月」「短冊家工場」の記載があり、工場内の職人のための鉢の模様見本帳として作成されたものである（したがって刊行されたものではない）。その中には、約70点を超える見事な錦鉢（ラン鉢、万年青鉢、富貴蘭鉢など形状は異なる）の模様見本と色・金彩の指示などが細かく、一部はカラーで綿密に描きこまれている。絵の精密な筆遣いから見ても、当時の短冊家で絵付の指導的立場にいたトップの絵師^{（註17）}が描いたものとみてよいだろう。鉢には1点ずつ「第老号」～「第六拾五号」（筆者が確認できた頁まで）までの番号が付けられているが、途中から番号がない一群も含まれる。もともと、この画帖自体はいくつかの本に分かれていたものを1冊にまとめたらしく、実際に何点の模様見本がおさめられていたか不明である。

また不思議なのは、模様見本にもかかわらず「三掛」「五半掛」「七掛以上」などの価格にかかわる文字^{（註18）}まで書き込まれていることである。これは「黒無地」の鉢を基本とし、その何倍の値をつけるかを記したものと推測される。通常、「〇〇掛」は元値の「〇〇%」として割り引いて考えるのだが、ここでは「〇〇倍」の意味で用いられている。下は「三掛」から上は「拾掛以上」まで、かなり価格は幅広い。本資料が窯元の内部資料として用いられていたことが明らかになる一方、どのような絵付であれば値段が高くなるのかまでははっきりしない（図23）。絵具の色の指示としては、「赤」「青」「白」「黒」「黄」「紫」「葉緑」が良く見られる。「葉緑」というのは、短冊家の鉢に特徴的な青みがかかった緑、もしくは「青」との混同を避けるための独自の指示と思われる。価格に関しては、短冊家 和楽に残るもうひとつの新出資料である昭和10（1935）年4月の『黒楽焼植木鉢価格表』^{（註19）}（図24）がある。この「価格表」は、五代川崎庄七氏の名で発行されており、基本の黒無地の鉢に「錦画模様儀 ■ 御好ニ応ジ右價格ヨリ三倍之至拾倍ニテ金付ナシ」としている。つまり、「錦画模様」を好みに応じて3倍から10倍の価格を上乗せして絵付けをするということだ。『錦画鉢模様控』より43年後の資料となるが、錦鉢の需要と価格付けについては特別大きな変化がなかったことがうかがえる。

このほか、『錦画鉢模様控』には、鉢の注文主とおもわれる人物名・店名が書き込まれていたり、「東京から見本品」があったことなどを示す文字があったりと、読み進めてゆくことで

鉢の流通等のヒントとなる事項も記載されており、今後の課題として分析を進めてゆきたい興味深い資料である。

短冊家の錦鉢の特徴としては、川寄基生氏によれば「加茂石を使った深い黒楽釉の発色」と「絵の具を盛り上げすぎない精緻な絵付」ことが主にあげられる。黒楽釉の発色については、経年変化などによりつややかな深い黒が目立たなくなってしまう鉢もあるが、絵付の文様やタッチについては『錦画鉢模様控』や現在短冊家製とされている作品などを基に、他の窯元とある程度の区別を図ることができる。鉢の形状や土に関しては、今回はその特徴を細かくとらえることはできなかった。

また、短冊家の錦鉢にはまれに鏝の内側に色絵具で小さな丸印が書かれることがある(図25)。これは、川寄貴生氏の考察では、当時の上絵窯の構造から色見と考えられている。この位置に絵の具をつけておくと、作品をわざわざ窯から取り出して絵具の溶け具合をチェックする必要がなく、また鉢に植物を植えた際には見えなくなるためだ。上絵窯には一度に複数の鉢を入れるが、そのうちの一つだけに色見をつけておけばよいので、この丸印のついている鉢の数は相対的に少ないのだろう。いつごろ色見を用いなくなったかは不明だが、温度がはっきりと測れる窯になった後はその必要もなくなったはずであり、この丸印がある鉢は比較的古いものと考えられる。

さて、改めて明治期の資料として『万年青盆図譜』と『錦画鉢模様控』を比較すると、共通する柄がいくつか見られる。おそらく、『万年青盆図譜』の一部には短冊家の人気の鉢を取り上げられているのだろう。となれば、錦鉢は『錦画鉢模様控』が作成された明治20年代までには、短冊家で錦鉢は盛んに制作されるようになっていたはずである。

ところで、この錦鉢の色絵金彩だが、著者にはひとつ類似する分野が思い当たる。ちょうど明治初期から大正期にかけては、日本の窯業は海外輸出の隆盛を極めており、西欧に人気のあった過剰なまでに装飾を盛り込んだ技巧的なやきものを多数制作していた。錦鉢は、この時期に京都のみならず日本の窯業地全体に共通していた、いわゆる「絢爛豪華」な絵付けの感覚を反映しているのとらえられる。黒地(他のやきもの場合は漆に見立てた黒絵具だが)と色絵金彩の強いコントラストや立体的なモチーフは、名古屋を中心に作られた「デコ盛り」をも思わせる。これまで、輸出陶磁器に主として現れたとされてきた「絢爛豪華」さは、実は国内の園芸の一分野の中に根付き、現代^(註20)まで続いていたのである。

5-4 昭和期：東京・三河での錦鉢制作

錦鉢の制作方法については前項で触れなかったが、基本的には茶陶に用いる黒楽焼と手順や原料において違いはない。ろくろ成形(現代は型も用いる)のち、約800°で素焼きを行い、窯元独自の黒楽釉を重ね塗りしたのち約1200°で10

分ほど本焼し、すぐに水につけて黒を発色させる。現在はガス窯も用いるが、従来は楽焼窯で少量ずつ焼成を行っていたという。その後、各色の絵の具や金で絵付けを行っては、その絵の具が解ける温度で焼き定着させることを繰り返して仕上げていく。

さて楽焼といえは京都ではあるが、錦鉢の産地は東京、三河(現在の愛知県西部)にも広がっており、昭和期にはこの手法を使って盛んに生産を行っていたようだ。万年青などの園芸ファンが集中していた東京への窯元の進出は十分に考えられることだが、興味深いのは三河地方にかなりの数の窯元が存在していたことである。

現在、愛知県高浜市において錦鉢生産を手掛ける澤製陶所(利山工房)の澤利一氏が所蔵する、月刊の業界誌『園芸趣味』^(註21)において、同氏が所蔵の昭和13(1938)年～昭和14(1939)年にかけての5冊の誌面には、東京と三河において合計8件の「楽焼」窯元が広告を出している(図26)。以下、表に書き出しておく。

当主(広告主)	屋号	住所	
鳥居彦四郎	京楽焼・三河楽焼窯元 開楽園	碧海郡新川町千福	
神谷長平	三河楽焼・京楽焼窯元 改楽園	碧海郡明治村西脇	
板倉周一	三河楽焼・京楽焼販売・ 窯元 好楽園	碧海郡新川町小学校西	
都築勝士	三河楽焼	碧海郡高浜町	
石川万太郎	昭楽焼・京楽焼 各種鉢窯元	碧海郡高浜町第五部	
杉浦辰之助	三河楽焼	碧海郡高浜町高浜23	
共同で 広告	杉浦勘之助	京楽焼三河元祖 京楽焼三河楽焼鉢・錦 絵一式	碧海郡明治村西端
	手島肇二	京楽焼東京元祖 京楽焼三河楽焼鉢・錦 絵一式	東京市本郷駒込林町10

『趣味園芸』の広告欄には、日本全国各地の「万年青培養販売」や「春蘭培養」など、栽培する園芸店の広告が連なっているが、錦鉢の窯元となると上の表のようにほぼ碧海郡^(註22)の窯元が占めており、東京は手島肇二のみ、京都は見つけることができない。今回は上掲いずれの窯元についてもその創始を探ることはできなかったが、このうち、澤氏によれば、共同で広告を出している杉浦勘之助と手島肇二は親戚関係にあり、東

京で手島に技術を学んだ杉浦が三河にて黒楽焼を始めたと言われているという。とくにいま万年青ファンの中で「手島鉢」とよばれる錦鉢があるが、これはイチチンを用いて立体的に唐草や青海波などの模様を施したもので、手島肇二がオリジナルを製作したとされる。制作当時から人気を得ていたようで、この装飾法を取り入れた窯元は三河にも多くあるようだ。

三河地方には、「三河粘土」と呼ばれる盆器に向く良質な陶土が産出することから、もともと高浜の瓦生産、土人形等に代表されるように窯業が盛んな土地である。小笠原氏によれば、本来の楽の土よりも、三河粘土のほうが丈夫な鉢となり、植物の根の力に耐えるという園芸側からの要望も理由も推測される。

5-5 田中本家博物館コレクションの錦鉢

ここまで、江戸期から昭和期にかけての錦鉢の概要を追ってきたが、本論で調査対象としている田中本家博物館コレクションの錦鉢は、いつ、どこで制作されたものになるのか、考察していく。

まず、43件155点の黒楽焼鉢のうち、主に栽培用に使用したであろう黒無地のものと、絵付けを施された錦鉢とに分ける。鉢の種類としてはほとんどが万年青専用だが、蘭と富貴蘭専用の形状のものも数点含まれる。

黒無地	94点	最大：幅24cm 最小：幅7cm	総高27cm 総高5.4cm
絵付有	61点	最大：幅23.5cm 最小：幅9.3cm	総高23.8cm 総高8.7cm

このうち、黒無地94点に関しては、底部に墨書が残るものもあるが、販売店における目印や購入後の整理用と思われ窯元を特定できるものではない。最小のものは口径7cm程の富貴蘭鉢様のものであり、最大は口径24cmの三脚の万年青鉢である。中には、他と異なり胴部がずん胴であるものや、土が赤く発色しているものも数点みられる。これらの特徴は制作年代と産地を特徴づけるポイントになりそうだが、年代のわかる基準作品が現在のところ存在しないため、詳しくは不明である。

錦鉢61点については、大きさでは黒無地より小さいものが多い。大部分が「胴がえし（鏝直径と高さが同じになっている鉢）」の5寸ほどのサイズである。異なるタイプの絵付がみられることから、数軒の窯元のものも混在している。

このうち、前掲の短冊家『錦画鉢模様控』を参照すると、完全には一致しないものの、共通する要素を持った絵付けがいくつも見つかると、錦鉢全体の約半数ほどを占めるのではないと思われる（図27）。また、短冊家の特徴的な色見が鏝内面にあるものも現時点で4点確認できている。イチチンが特徴的な「手島鉢」風のものも数点みつかると（図28）。その

他は、絵付け雰囲気や技法などが異なるものの、窯元までは推測できないものが多い。

以上のことから、田中本家博物館コレクションの錦鉢は、ほぼ半数が明治期の短冊家製とみられる特徴を有していることが分かった。（もちろん、現段階では著者の推測が多分に含まれており、今後の調査によっては訂正すべき事項も現れる可能性があることを断っておく。）

佐賀氏は、立体的で比較的力強い雰囲気「手島風」の鉢よりも、まるで華やかな着物の柄を思わせるような、精緻な絵付けの「短冊家風」のものが好みであったとも推測される。そして、その管理については棚を別にし、錦鉢は上段に丁寧に置いていることから、他の盆栽とは別格の大切な賞玩の対象として扱っていたことがわかる。

6. まとめと今後の課題

今回、田中本家の盆器コレクションの中でも黒楽焼の鉢に注目した。陶磁史上では取り上げられることがこれまでなかったものの、中国製が最高峰とされる盆器の世界においては、日本国内の価値観を独自に反映させた、もうひとつの最高級品として今も君臨している存在である。

楽焼という国内のやきもののヒエラルキーのトップに位置する、そして趣味性の高い素材に、明治期の輸出陶磁制作の頃から盛んになった色絵金彩や立体的な装飾を合わせた錦鉢は、日本独自の万年青や蘭のブームに応じてその時の国内の“最高”を組み合わせた画期的な存在であった。そして、誕生からすぐに園芸ファンの賞玩と蒐集の対象となり、現代までその価値を変えることなくいたっている稀有な存在であることが分かった。

最後に、今後の課題について書き出しておく。本コレクションの調査自体が終了していないことから、ここでは黒楽焼の鉢についてのみ触れる。

6-1 同家の蔵書からの考察

今回、本コレクションの黒楽焼の鉢については、同家に残る文献や写真資料などの調査が十分でなく、詳しい使用状況を探ることができなかった。万年青や蘭は育て方の困難さゆえに、教則本の類や、趣味を同じくする者たちのサークル誌などが残されている可能性がある。この出版年などから、正確な鉢の使用期間が考察できるだろう。

6-2 購入年代と制作年代

また、今回は明治期以降の錦鉢が多くを占めることが分かったが、これらの制作年代と購入年代がずれる可能性を検証できなかったことも課題である。園芸ファンの間では、常に「古鉢」への憧れがあることから、あえて古い年代のものを選んで購入していたとも考えられるのである。これも、同家に残る領収書や鉢の引き札（広告）の調査に取り組むことで、明

らかになるかもしれない。

6-3 黒楽焼の鉢の基準作品

肝心の鉢の制作年代の設定において、今回は先行研究や園芸関係の文献を主にしたが、実物資料において基準年代の判明している鉢を探す必要がある。また、鉢の形状、絵付けの種類などである程度の編年を組む必要もある。今回、錦鉢には、輸出陶磁器に現れたとされてきた「絢爛豪華」さが今も息づくことに思い至ったが、実際の製作者たちはどのような生産体制や意識のもと鉢を作り、購入者とかかわりを持っていたのかをより詳しく探っていきたい。

以上、本論では本コレクションの調査レポートとして、まずは黒楽焼の鉢をとりあげたが、これについてもまだ多くの課題が残されている。今後は、これらの課題にとりくみつつ、田中本家の豊かな園芸趣味の全容を明らかにすることを目標として、残されている多数の盆器についても調査をおこなっていきたい。

謝辞

本稿執筆にあたり、次の方々にご協力・ご助言を賜りました。記して感謝申し上げます。(敬称略、個人名は50音順)

田中本家博物館

澤製陶所 利山工房

短冊家和楽

小笠原左衛門尉亮軒

川寄基生

川寄貴生

澤利一

田中和仁

田中宏和

山下峰司

註

註1 「豪商の館 田中本家博物館」は長野県須坂市殺町476にある、平成25年で開館20年をむかえる博物館。享保18(1733)年に初代当主・新八が穀物、菜種油、煙草、綿、酒造業などの商売を手掛け、以後代々須坂藩の御用商人を勤めた北信濃屈指の豪商に成長。その館を利用した博物館で、約100m四方を20の土蔵が取り囲む屋敷の作りを残している。

またこの土蔵には、江戸中期から昭和までの田中家代々の生活に使用された品々が保存されている。今回の調査では、その蔵のうち1つを占める盆器コレクションについて、その年代・産地を解明するとともに、同家での位置づけを探るものである。

註2 大橋康二「陶磁器に見る植木鉢の歴史」、太田記念美術館『特別展 江戸園芸花尽くし』太田記念美術館、2009、117頁

註3 大橋康二「陶磁器に見る植木鉢の歴史」、太田記念美術館『特別展 江戸園芸花尽くし』太田記念美術館、2009、118頁

註4 小笠原亮『江戸の園芸 平成のガーデニング』小学館、1999、8～17頁

註5 太田記念美術館『特別展 江戸園芸花尽くし』太田記念美術館、2009

註6 昭和期の園芸について、小笠原氏は江戸の園芸ブームが元禄の頃から始まっていることを例にし、「昨今の園芸ブームは、戦後を起点にして、ちょうど元禄にあたる頃ではないか」と捉えておられる。昭和期は「洋ランへの憧れ」をきっかけとし、「バイオテクノロジー」を促進させ多くの人々が豊富な品種を楽しむようになった現象が、江戸期の園芸ブームと重なる。

註7 万年青についての基礎的な情報は次を参照した。

水野淳蔵『萬年青の歴史』豊明園、2004

水野豊隆『別冊趣味の山野草 万年青 始めよう！伝統園芸～人気品種と育て方～』枳の葉書房、2012

註8 水野淳蔵『萬年青の歴史』豊明園、2004、121頁

註9 長生舎主人『金生樹譜別録』、文政13(1830)

図版に引用したのは天保年間の再刊行のものである。本資料に関する国会図書館の解説を以下に引用しておく。

「著者・長生舎主人は幕臣(奥御右筆)で故実家の栗原信充(のぶみつ、1794～1870)である。信充は万年青なども好み、「金生樹譜シリーズ」7点を刊行する予定だったが、第1冊の『金生樹譜別録』、第2冊の『万年青譜』、第3冊の本書と、3点だけに終わった。」

註10 長生舎主人『万年青譜』天保4(1833)

註11 小笠原亮『江戸の園芸 平成のガーデニング』小学館、1999、107頁

註12 水野忠暁編・関根雲停画『小おもと名寄』天保3(1832)

本資料は天保3(1832)年に江戸蔵前の八幡社で開かれた小万年青の展示会に際して刊行された刷り物で、各帖とも15品が描かれている。

註13 草伍逸史著・秋尾蒼山画『長生草六歌仙』天保8(1837)(※小笠原衛門尉亮軒『大江戸カルチャーブックス 江戸の花競べ 園芸文化の到来』2008、青幻舎より引用)

群芳園弥三郎ほか画『七福神草』嘉永元(1848)

著者未詳『にしきかゞみ』天保9（1838）頃

この3点の資料では、それぞれニシキランとチョウセイソウ、福寿草の鉢植えを黒楽焼と思われる鉢で紹介している。

註14 伊藤文庫『万年青盆図譜』明治45（1912）

註15 「短冊家 和楽」の屋号については、川崎基生氏によれば、五代のとき東郷平八郎が店を訪れた際に「和楽」という名前を賜り以後この屋号を使用しているが、万年青鉢には「短冊家」を引き継いでいる。したがって、本論は昭和前期までを対象とするため「短冊家」を使用させていただく。

註16 著者未詳『錦画鉢模様控』明治25（1892）、短冊家工場

註17 現代の万年青ファンの間では、短冊家で活躍した絵師の名を「五龍」または「五柳」とする説があるが、本画帖には名前は見当たらなかった。

註18 近世・近代の文献に詳しい山本氏によれば、「〇〇掛」には2つの可能性がある。ひとつは、価格。もうひとつは、黒楽釉を掛ける回数である。川崎基生氏によれば、価格である可能性のほうが高いということである。

註19 川崎庄七『黒楽焼植木鉢価格表』昭和10（1935）年、短冊家和楽

註20 川崎基生氏によれば、2度の大战期に入ると、経済的な混乱からも金彩は一時的に消えるなど需要の波はあったという。

註21 日月園『園芸趣味』、昭和8（1933）～

註22 現在の愛知県現在の碧南市、刈谷市、安城市、高浜市、知立市の全域、及び豊田市の南部、岡崎市の南部（六ツ美）および西部（矢作）、西尾市の北部（米津）である。

参考文献

長生舎主人『金生樹譜別録』1830

水野忠暁編・関根雲停画『小おもと名寄』1832

長生舎主人『万年青譜』1833

著者未詳『にしきかゞみ』1838 頃

草伍逸史著・秋尾蒼山画『長生草六歌仙』1837

群芳園弥三郎ほか画『七福神草』1848

著者未詳『錦画鉢模様控』1892、短冊家工場

伊藤文庫『万年青盆図譜』1912

日月園『園芸趣味』、1933～

川崎庄七『黒楽焼植木鉢価格表』1935、短冊家和楽

矢部良明監修『田中本家伝来の陶磁器』1999、(財)田中本家博物館

小笠原亮『江戸の園芸 平成のガーデニング』1999、小学館

水野淳蔵『萬年青の歴史』2004、豊明園

小笠原亮、山口安久『NHK 趣味の園芸 伝統園芸植物と盆栽～器の取り合わせと席飾り』2005、日本放送出版協会

小笠原左衛門尉亮軒『大江戸カルチャーブックス 江戸の花競べ 園芸文化の到来』2008、青幻舎

太田記念美術館『特別展 江戸園芸花尽くし』2009、太田記念美術館

さいたま市大宮盆栽美術館『平成23年度特別展 ウキヨエ盆栽園～盆栽ダ、明治ヲアソブ』2012、さいたま市大宮盆栽美術館

水野豊隆『別冊趣味の山野草 万年青 始めよう！伝統園芸～人気品種と育て方～』2012、柝の葉書房

図版



図1 田中本家博物館の盆器蔵
外観



図2 《黒釉鉢》
田中本家博物館蔵



図3 《緑釉鉢》
田中本家博物館蔵



図4 《瑠璃釉貼付文鉢》
田中本家博物館蔵



図5 《染付草花文鉢》
田中本家博物館蔵



図6 《貼付文水鉢》
田中本家博物館蔵



図7 《磁胎七宝波千鳥図植木鉢》
竹内忠兵衛・名古屋
愛知県陶磁資料館蔵



図8 《訳者地顔見立 植木市》 歌川国房 たばこと塩の博物館蔵



図9 田中本家博物館の盆器蔵内部



図 10 田中本家敷地内で撮影 大正期 田中本家博物館蔵



図 11 左から田中太郎、田中新十郎三次、田中千よふ
田中本家敷地内で撮影 大正期
田中本家博物館蔵



図 12 田中千よふ
田中本家敷地内で撮影
大正 10 ~ 11 年頃
田中本家博物館蔵



図13 田中千よふ 田中本家敷地内で撮影
大正10～11年頃 田中本家博物館蔵



図14 《染付唐草文六角鉢》 田中本家博物館蔵



図15 田中本家博物館 黒楽焼の鉢の棚



図17 『小おもと名寄』(一部) 天保3(1832)年 水野忠暁編・関根雲停画
国立国会図書館蔵



図16 『金生樹譜 別録一卷』(一部)
文政13(1830)年 国立国会図書館蔵



図18 『長生草六歌仙』(一部) 天保8(1837)年
国立国会図書館蔵



図19 『万年青盆図譜』(一部) 明治45(1912)年
国立国会図書館蔵



図 20 《新板 植木づくし》再板
 (ひめおもと、おもとの拡大図)
 歌川貞房



図 21 《しんばし植木尽くし》
 (「をもと」の拡大)
 一光 明治 28 (1895) 年

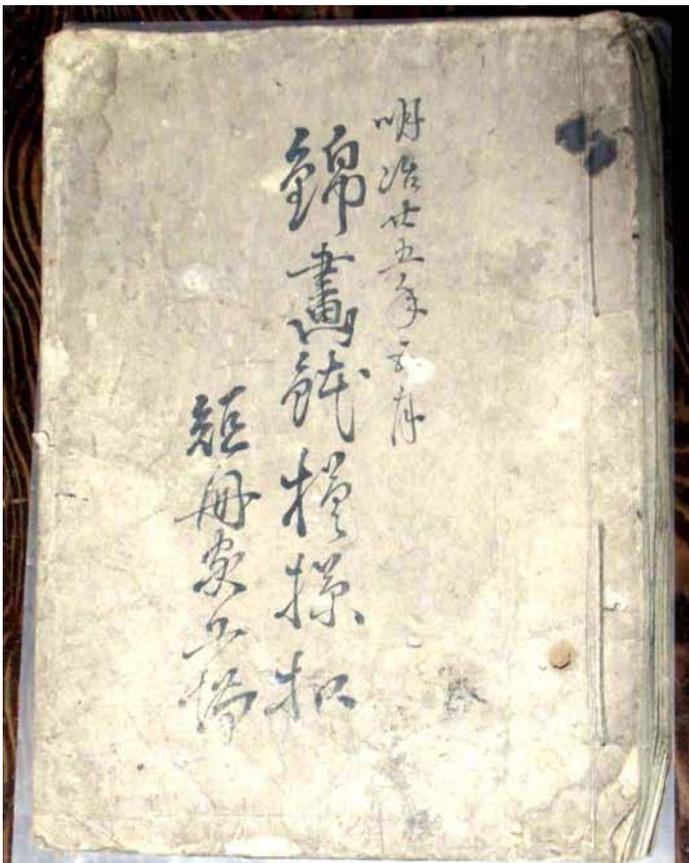
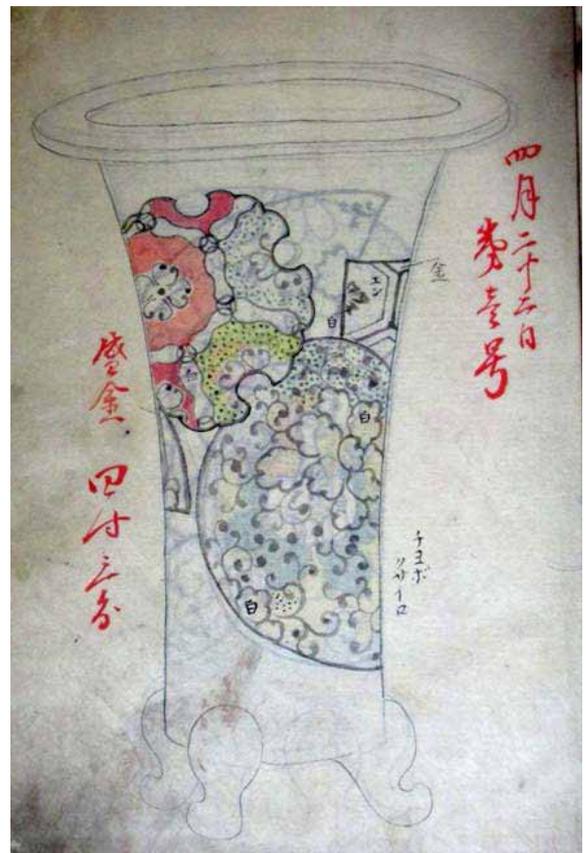


図 22 『錦画鉢模様控』 明治 25 (1892) 年 (表紙) 短冊家楽蔵 (中面 / 一部)





このページの場合、図による文様の指示に加えて文字で以下のように指定されている。

- ・鉢のナンバーは「第 60 号」
- ・絵具の種類や文様の指示は「絵具様々色を入る」
- ・価格は「六掛」
- ・「栗米余田行」は、おそらく「栗米余田」という発注者を指していると思われる。

図 23 『錦画鉢模様控』 明治 25 (1892) 年のページと記載文字の一例

寸法	萬年青鉢足付	蘭用高鉢
二寸五分	金貳拾五錢	金參拾五錢
二寸八分	金貳拾五錢	金參拾五錢
三寸	金參拾五錢	金四拾錢
三寸三分	金參拾五錢	金四拾錢
三寸六分	金四拾錢	金五拾錢
四寸	金五拾錢	金六拾錢
四寸三分	金六拾錢	金七拾錢
四寸五分	金七拾錢	金八拾錢
四寸八分	金七拾錢	金八拾錢
五寸二分	金九拾錢	金九拾錢
五寸五分	金壹圓貳拾錢	金壹圓貳拾錢
六寸	金壹圓貳拾錢	金壹圓貳拾錢
六寸五分	金貳圓五拾錢	金貳圓五拾錢
七寸	金貳圓貳拾錢	金參圓貳拾錢
七寸五分	金參圓貳拾錢	金參圓貳拾錢
八寸	金參圓八拾錢	金四圓五拾錢
八寸五分	金四圓五拾錢	金五圓
九寸	金五圓	金六圓

荷造費 一圓
 但錦畫模様の好、悪は右價格より二倍乃至三倍の金付ナシ
 白唐草青海波、梅、調製仕候は、懸在中被損生シ又ハ天災
 一遭遇セシ場合ハ、其責ニ不任候
 弊店従前各位ノ御愛顧ヲ蒙リ御座リ以テ日ニ月ニ御注文増加仕候有
 奉萬謝候儀ナリ今般向一層佳ク且精々廉價ニ販賣仕候間
 諸君御注文ヲ奉希望候也
 附言 遠隔ノ各位代金御定附ハ京都月見町郵便局爲替又ハ振替ヲ以テ
 御出シ被下度候
 昭和十年四月 短冊家和樂 川崎庄七
 京都市東山区下河原通月見町五拾四番戸
 電話 錦町 二六二八番
 電話 六本木 六〇〇九番

図 24 『黒樂焼植木鉢價格表』 昭和 10 (1935) 年 短冊家和樂蔵



図 25 色見と推測される印のある鉢 田中本家博物館蔵

京樂燒東京元祖 手島攀二

東京市本郷區駒込林町一〇
電話駒込〇四六一番
振替東京三三三六五番

萬年青鉢	蕙蘭用鉢	觀音竹鉢	金龍邊鉢	春蘭鉢	溫室用鉢	一般園藝用鉢
------	------	------	------	-----	------	--------

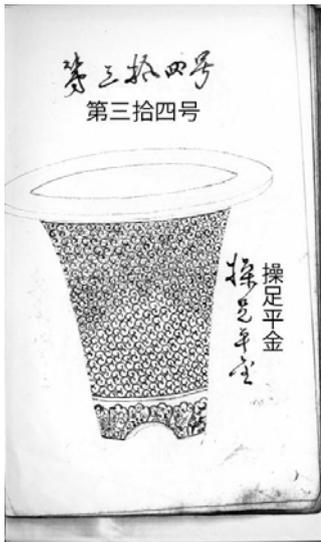
(カタロク進社)

愛知縣碧海郡明治村西端(電話新川二四九番)
京樂燒三河元祖 杉浦勘之助
振替大田四六六六五番

式一鉢繪錦 鉢燒樂河三 鉢燒樂京

図 26 『趣味園芸』 昭和 13 (1938) ~ 14 (1939) 年 (一部広告)
(杉浦勘之助、手島攀二)

図 27 『錦画鉢模様控』と田中本家博物館蔵の錦鉢の比較
 (『錦画模様控』には、読み下しの文字を入れてある)



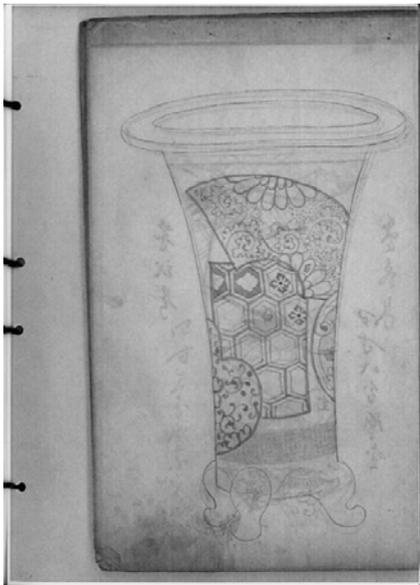
『錦画鉢模様控』は三脚ではないが、文様の指示が一致。



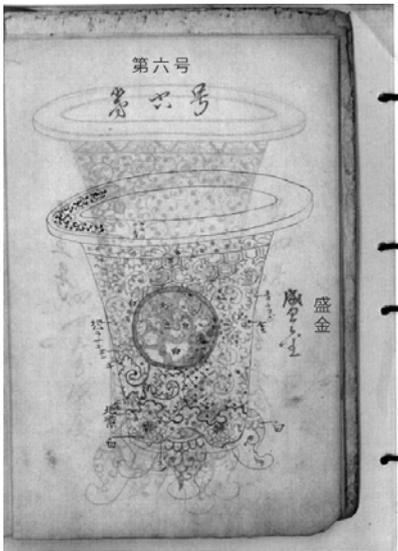
作品は七子ではなく七宝と青海波で埋め尽くしている。瓔珞文も黒釉の部分にさらに描き足されている。



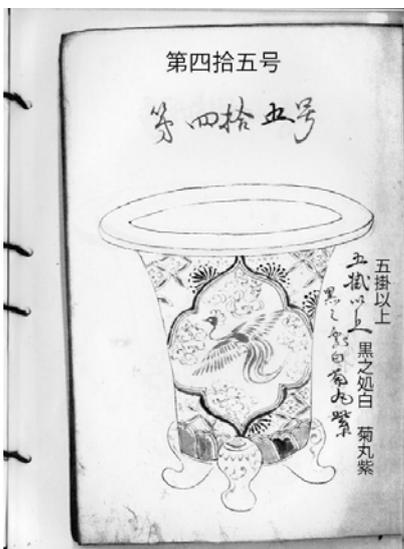
この作品の罎内部には、色見の丸印が入る。



『模様控』の形状は蘭鉢だが、扇面を配する構図が似る。作品には紫や黄色の点描が用いられ、「地白」でもある。



この作品の罎内部には、色見の丸印が入る。



模様控は太鼓の飾り突起がない、窓絵の中のモチーフが異なるなどの差がある。



模様控は花菱、作品は七宝繫ぎの違いあり。



模様控の「花中白」はこのような絵付か。



図 28 イッチンで文様を施した鉢
田中本家博物館蔵